

増穂だより

M A S U O D A Y O R I

中学卒業式典号



芝浦工業大学柏中学高等学校

http://www.ka.shibaura-it.ac.jp

〒277-0033 千葉県柏市増尾700番地

TEL 04-7174-3100(代) FAX 04-7176-1741

編集 総務部

発行日 平成31年3月22日

印刷所 株横浜綜合写真

考動する大人へ

— 18期生卒業 —

2018年度芝浦工業大学柏中学校卒業式告辞

— 学校長—野村—春路—

物語を求めて

今日はホヤの話から始めたいと思います。ホヤといってもすぐには頭に浮かばないと思いますが、海に生息して、一見植物の一種とさえ間違えられる外観を持ちますが、原索動物といって、われわれ脊椎動物に進化する前段階にある動物です。「海のパイナップル」という異名があり、海産物として賞味されるため、スーパーなどの鮮魚売りに並んでいることがあります。この動物は、成長過程で変態をしていきます。幼生の時期には「オタマジャクシ」の形態をとり、尾部を振って活発に泳ぎ回り、やがて岩などに固着すると、尾部を失うなど変態を始め、成体の形に変化します。このホヤは、地球上の生物が海から陸に上がる進化の過程を再現できるという点で、生物学上とても有用な研究対象となっています。

さてここからですが、ホヤは幼生の頃はオタマジャクシのような姿で海を泳ぐため脳を持ちますが、岩場などに定着し、もうここで生きていくと決めてしまうと泳ぐ必要もなくなり、自分の脳みそを消化してしまうのです。ヒトのように脳を発達させて種を繁栄させて進化していった動物もありますが、一方で進化の過程で「脳はいらない」として、捨ててしまったかのように見える動物もあり、それがホヤなのです。

この現象を踏まえて、頭木弘樹さんという文学紹介者・翻訳家が、次のようなことを言っています。

「幼いホヤってというのは、すみかを探して移動し、海の中で一番自分の生存に適した場所を探すわけです。探すためには脳が必要なので、脳がある。そしてここで俺は生きていけるぞってなると、そこにホヤは住み着いて、そうしたらもう脳は要らないので、食べてしまうのですね。その後は、ずっとそこで生活して行く。このことを、ヒトに当てはめてみると、(生きて行く上での)物語が入る・入らないと同じことなのかなと。要するに、現実がよくわからない、どう生き

ていいかわからないといろんな物語が必要になるわけです。子どもは現実がよくわからないですから、物語を手がかりに一生懸命この世の中どういものなのだろうと知ろうとするわけです。それで、大人になるともう別の世界を知らなくても生きていけるような感じになる。そうすると新しい物語はもういらない、ということになってしまうでしょう。」

頭木さんは、自分が生きて行く現実世界がわからないから、様々な物語、これは生き方と言い換えてもよいと思いますが、それらを学び取ろうとする必要があり、もう別の世界を知らなくても大丈夫であると安住すると、自分の好きな物語しか必要としなくなる傾向がヒトにはある、それでは自分で自分の脳を食べて、岩に付着しているだけのホヤのような存在ではないか、と言っているのです。

物語や小説、あるいは映画やドラマは、確かにフィクション、作り話ですので、実際の世界に起こったことではないかもしれませんが、しかしそれらは、いろいろな現実の中から、ひとつの現実の典型的パターンを示しているものなのです。物語や小説などの登場人物の生き様に興味のない人、または自分の好きな世界だけしか認めない人というのは、目の前の生活に安住してしまい、実際の現実の中で起きる変化にはついていけなくなってしまうと思います。

ましてや、今みなさんが進んで行く近未来には、大きな社会変化が待ち受けています。ホヤの成体のように、その環境に一時的に安住し、脳を失ってしまうようなことがあれば、次の大きな環境の変化には決して適応できないでしょう。みなさんは、まだまだ多くの心動かされる物語、多様な生き方を知る必要があります。そのためには、自分の好きな物語だけに埋没せずに、新しいジャンルの本を読む、あるいは様々な体験を自分から求めて挑戦することが大切です。どうかホヤの成体のようには、ならないでください。

中学の卒業式にあたり、今後みなさんが持って欲しい心構えについて、お話しをしました。

開式の辞
校歌斉唱
卒業生代表の言葉
卒業生保護者代表の言葉
祝電披露
在校生代表の言葉
学校法人代表式辞
学校長告辞
賞状賞品授与
卒業証書授与
開式の辞

